有形文化財（考古資料）

５０．須恵器子持長頸瓶　1口

■指定年月日　昭和 46 年 12 月 10 日 (1971)
■所　在　地　蛸島町 1-2-563（珠洲焼資料館）
■寸　　法　器高 30.5cm　口径 11.3cm
胴径 20.3cm　底径 13.5cm
■所　有　者　珠洲市

須恵器とは、古墳時代の 5 世紀頃に朝鮮半島から伝わった、窯を使って焼物を焼く技術によって、日本で焼かれたものであり、それまでの日本の縄文土器や弥生土器、土師器といった素焼のものとは大きく異なる焼物であった。

この須恵器は長頸瓶といわれる形式で、肩の部分にミニチュアの壺などが取り付けられていることから子持長頸瓶とよばれているが、台脚は一部、欠損している。

本体にはカキ目（櫛状工具で回転を利用して施された器面調整）や刺突文（櫛状工具の先で付けられた文様）があるが、肩部の小型須恵器も単なるミニチュアでなく、同様の調整がされており、実物の忠実な模倣であろう。本体や小型須恵器の形から 7 世紀の製品と思われる。

珠洲では 200 基を越す古墳時代の横穴墓があり、この須恵器もその中の谷崎横穴墓（宝立町春日野）から出土したものだが、出土状況は不明である。

横穴墓にはそれぞれ大量の須恵器が副葬品として納められているが、これまでのところ、珠洲では古墳時代の須恵器の窯跡は発見されていない。